

《追悼の辞》

故 田辺照子先生を偲ぶ

田辺照子先生がお亡くなりになって早くも一年余の月日が過ぎようとしております。ここに生前のお人柄と御業績を偲び、追悼の論文集を編むことにいたしました。

先生は大正15年（1926年）8月1日、東京足立でお生まれになり、平成2年（1990年）11月16日、64歳という若さで他界なさいました。2年余り前から体調をくずしていらっしゃいましたが授業や演習に強い責任をお感じになり、無理をして御登校のお姿にしばしば接したものでした。女子教育にたいする情熱を終生失なわない方でもありました。

生前、よく承けたまわったことですが、先生は晩学の方でありました。昭和21年（1946年）、明治女子専門学校（現短期大学）経済科に入学され、それがその後の先生の研究者としての道に連なることになりました。同校卒業後は明治大学商学部、同大学院（旧制）へと進まれ、社会政策論の研究に没頭されることになりました。第2次世界大戦中に軍需工場で女子挺身隊員として機械の油にまみれた経験をお持ちの先生は、戦後、御自身の研究課題として女子労働論を迷うことなく選ばれ、終生

精力的にその研究にいそしまれたのであります。戦時中のダイリレーションに関する研究は、そのような先生の体験が裏打ちされているという意味においても貴重なものであります。働く女性にたいする強い共感をお持ちでありました。労働する女性の保護と平等という問題についても社会的発言を積極的になさったのであります。女子労働の国際比較という視点も早くからお持ちになり、昭和42年（1967年）から約1年間、明治大学在外研究員としてイギリス、旧ソビエト、ポーランドに御滞在なさり、それぞれの女子労働の雇用・労働条件についての知見を深められました。その後、昭和50年代初葉には、国際婦人年世界大会への出席や、旧東ドイツ、中国等にも出張になり、その女子労働の現実にたいする理解を深められたのであります。

先生はまた、学生を非常にかわいがる方でもありました。昭和40年代初頭の学園紛争の「ロック・アウト」のもとで、先生は御自宅でゼミを開講なさり、学生と一緒に勉強なさいました。勉強だけではなく大いに御馳走をつくって学生たちにふるまわれたのであります。「田辺先生の手料理」について幾人かの卒業生がなつかし気に語りかけてきたことを、私は昨日のことのごとく思い出します。また、「明短」の女子学生だけではなく、出講していらした法学部の学生たちとも一緒に、ハイキングや野球、ラグビーの応援を楽しんでいらっしゃいました。賑やかなことがお好きで気さくなお人柄の先生は、学生たちの「人気者」でもありました。このような先生を、あるいはまた

戦後の「明短」での女子教育推進のための同志を、このように早く失なわねばならなかったことは誠に痛切の極みであります。

明治大学を非常に愛していらした先生は、東京郊外、国立のお住居を、学校法人明治大学に遺贈して逝かれました。「外国から明大に来て勉学する研究者たちに寓居を役立ててほしい」というのが先生の御遺志でした。先生の散策なさった緑ゆたかな地に、そのような先生の願いが実るときもさほど遠くはない、と聞いております。

学生と研究を愛し、道半ばにして帰らぬ人となった田辺照子先生をお偲びし、私どもは研究と教育にたいするいっそうの努力の傾注を誓い、次の世紀にむけての躍進を祈念したいと存じます。

1992年3月

明治大学短期大学長

岡 山 礼 子